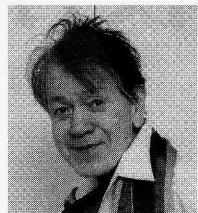


風紋



ムロアジの一夜干しは まぼろしになつた

作家

志茂田景樹

伊豆の海辺の村にある母の実家で、僕は生まれた。母は出産のために里帰りしていたので、やがて僕を抱いて東京都下の国鉄官舎に帰った。

国鉄職員だった父は、晩酌の友にアジの干物を好んだ。物心がついた頃から、その光景と、台所から流れくるアジの干物が焼かれる匂いは、僕の日常に溶け込んでいた。ただ微妙に違和感を抱かせた。

それは父が実際にうまそうにアジの干物をつつく表情と、それが焼かれるときの不快な匂いからきていた。母が街で買い求めたアジの干物はコチンコチンに硬くて、焼くと立ち上る匂いには魚のものとは違う何か不自然な臭気がこもった。

僕はそのときいつも母の実家の食卓に上がるアジの一夜干しの味と、それが焼かれるときの匂いを思い浮かべていた。

兄姉たちとかなり年が離れた末っ子の僕は、ゼロ歳時から年に数回は両親とともに、また母におぶわれて母の実家を訪れた。母の実家はミカン農家で、浜から少し離れたところにあつたが、浜からサイレンの音が響き渡る

とバケツを手に浜へ駆けた。

サイレンは地引網を上げる合

図で、漁師に限らず地域の人々

が手伝いに駆けつけた。叔父はバケツに山盛りのムロアジを貰ってきた。それを叔母が大きなまな板で手際よく開いていった。

3、4歳の頃の僕はムロアジが開かれていくのを、すぐそば

でジーッと見ていたそうである。開かれたムロアジは、夜になる風通しのいい戸外に干された。そういう光景をまだしっかり記憶できなかった1、2歳の頃でも、僕は、母に言わせると、「おっぱいを吸ったあとで、一夜干しの身をほぐしてあげると、美味しそうに食べていたわねえ」ということになる。

僕は乳離れが遅かった。それはともかく、母の実家で作るムロアジの一夜干しの味と匂いは、幼時から僕の体と心に染みついていたのである。コチンコチンのアジの干物が焼かれる嫌な匂いと、それをうまそうに食べる父の顔は、僕には理解し難かったのだろう。

小学校に上がると、たまたま母の実家に泊まっていたときに、サイレンが鳴ると、叔父は浜へ連れて行ってくれた。地引網の引き網を地域の人々と掛け声とともに引く快感は今でもよみがえた。

一夜干しがないなあ

僕の不満顔に、叔母が言った。「とっくに浜から地引網は消えたよ。地引網を出したって、もうここではムロアジはからねえだよ」

あの一夜干しの味と匂いは、まぼろしのものになった。

中学2年になってから、母の実家へ行くことはバタリとなくなった。親と一緒に行けるか、硬いアジの干物を、僕は敬遠していた。高校生のとき、そうだけ自分で作っちゃえ、とアジを数尾買ってきて叔母の手際を思い出しながら開いて一夜干してみたが、食べたものではなかった。

社会に出てまもなくの頃、親の名代で母の実家で催された法事に出席した。

翌朝、ご飯に乗っけて食べる

一夜干しの味わいは格別のものがあった。

をいっぱい呑み込んだ網の一部が姿を現し、銀鱗がキラキラ日に映えた。